



ビニールハウス内に設置された「e-kakashi」。新規参入のハードルが低くなる注目の農業IT。

農業版「カーナビ」で 新規就農者をサポートする

e-kakashi

東京都港区



「日本の農業にもっとITを」と話す戸上さん（左から2人目）と開発チームのメンバー。

AGRICULTURE



AI

経験と勘頼みだったこれまでの農業に、
ITが風穴を開ける。
環境データを自動で収集し、
収穫までナビをする「e-kakashi」。
新規就農者や若手農家の強い味方だ。

ビニールハウスで目を光らせるのは、かかしはかかしでも「e-kakashi」。ほ場（田畑）の環境データを自動で集め、植物科学に基づいてAIが分析。スマホやタブレットで「そろそろ収穫できます」「もっと水をあげて」と知らせてくれる。

「カーナビをイメージするのとわかりやすいですよ」とその役割を説明してくれたのは、開発を担当したPSソリューションズ（東京都）の戸上崇さんだ。

「種をまくところが出発地、収穫が目的地。加工用に大きいトマトにするのか、甘いトマトにするのか。どんな作物にするかがルート選び。それを設定することで収穫までをナビしていきます」

農業技術をITで継承する

とりわけ新規就農者には心強いITツール。ベテラン農家が培ってきた「勘と経験」をほ場の環境データから見える化し、新規就農者はそれを「教科書」に農業を実践できる。「最初は『まゆつばものだ』と相手にしてくれなかったベテラン農家さんも、分析データを見せると『こんなことできるんだ』と驚き、協力的になってくれることが多いですよ」

2015年の販売開始以降、導入例は全国の自治体や大型農業法

人、JAなど300件を超える。人口約2万人の京都府与謝野町は実証段階からかわつてきた自治体のひとつ。町内のベテラン農家と新規就農者に「e-kakashi」を貸し出し、お互いのデータを見られるようにしている。与謝野町役場農林課の担当者は「直接指導を受けなくても、ベテラン農家の栽培データから農業技術を学ぶことができる。後継者の育成に役立っています」と話す。

遠くの「師匠」に学ぶ

「e-kakashi」を使い、付加価値の高い農作物にチャレンジする若手農家も出てきた。横浜市金沢区の椎草農家・永島太一郎さんは、その希少性と豊かな食感に魅かれ、今春から国産キララゲの栽培を始めた。「師匠」は福島県内の経験豊かな農家。ハウス内で収集された環境データにならって自分のハウスの栽培環境を整える。「事業として成り立つ収益性の高い農業を旨とすうえで『e-kakashi』は強い味方」と期待する。

「e-kakashi」は進化し続けている。「農家さんの作業記録や労働時間などの情報を取りいれ、経営的な観点からも分析や提案ができるようにしたい」と戸上さん。

農業×AI。スマートに稼げる農業がいよいよ現実味を帯びてきた。

e-kakashi の取り組み

e-kakashi（ゲートウェイ&センサーノード）を使うことで、温度や湿度、日射量、土壌水分量などのデータから、生育ステージごとにどんなリスクがあり、どう対処すべきかを、AIが「植物目線」で科学的に分析。24時間365日体勢で、最適な生育環境へとナビゲートする農業向けITツール。経験と勘に頼った栽培ノウハウを形式化することで、品質向上、収量アップの可能性を高める。今後、AIによる園芸施設の換気窓の開閉や、水やりなどを自動で制御するサービスも開始予定。日本の農業をIT技術で見守り、サポートしていく取り組みを行っている。



開発者の戸上崇さん

https://www.e-kakashi.com/

農業の可能性を広げる「e-kakashi」とは？



センサーとクラウドで構成。ほ場で観測した環境データをクラウドに収集し、AIが植物科学に基づいて分析。結果をフィードバックするサービス。手持ちのスマホやタブレット、PCで確認できる。データを見える化するだけでなく、具体的に栽培方法をナビゲートするサービスが強い。

PSソリューションズ株式会社

東京都港区東新橋 1-5-2 汐留シティセンター 4F

https://www.pssol.co.jp

ソフトバンク株式会社が100%出資する子会社。通信キャリアで培ったノウハウを使い、低価格、高品質、ハイスピード化につながるITサービスを生みだし続ける企業。